研究ノート

佐伯雑記（七）

増村隆也

潮谷寺年表

一、永禄年間（1558－1569）大友宗麟が敵味方供養の為建立すと言う。開山昌誉より天誉迄の三代の間は不明なり。

一、慶長年中江戸増上寺の登誉来りて荒廃せる同寺の再興を計り中途にて没し、その弟子昌誉師の業を嗣ぎ慶長十八年（1613）落成し師の名を取って嶺雲山と号し、本尊阿弥陀如来は登誉が高畑の農某より譲り受けたものと言う。

一、天和二年（1682）三月船頭町、内町の大火に焼失し後再建す。

一、貞享五年（1689）正月船頭町、内町の大火に再び焼失し再建す。

一、宝永五年（1508）　財天女の廟を寺内に造営す。

一、正徳五年（1715）二月六代高慶浄修堂を寺内に建立し夫人宗琨子の冥福を祈り仏餉米三十五石を寄進す。

一、享保十四年（1729）十二月六代高慶は本尊阿弥陀如来を尊崇し龕扉を閉じ自ら弥陀の名号一万遍を浄書し之を胎中に納めたる新仏を造り、これを龕前に安置す。

一、元文元年（1736）六代高慶寺中に地蔵廟を建立す。

一、昭和十八年（1943）五月失火により本堂、庫裡皆灰に化し昭和三十一年（1956）二月再建す。

一、昭和三十一年（1956）落慶の式典に当り潮谷寺略記一千部を寄進す。

養賢寺年表

一、慶長十年（1605）毛利高政の建立、龍鼎山養賢寺と号し京都妙心寺派にして、僧三関を伊豆より聘して住持とし仏餉米百石を寄進す。三関後に大和尚となり寛永二十年（1643）没し大観慈光禅師と諡す。

一、元禄六年（1693）地蔵堂、蓮池、辨財天祠を造営す。

一、元禄十四年（1701）辨財天廟、礼拝堂落成し礼拝堂に僧悦山の書いた恭敬の扁額を掲げ恭敬堂と名付ける。

一、宝永四年（1707）住持乾堂円覚経を講じ遠近の僧参集し藩は白銀百両、米二十俵を寄進す。
一、同年六代高慶は高政の廟を造り高政の記を掲ぐ。
一、正徳五年（1715）住持乾堂大和尚となる。
一、享保十九年（1724）乾堂は宝林院に退隠、藩年二十俵を贈る。
一、寛延二年（1749）鶴屋城の落成に当り住持檀溪命により上棟文を作る。
一、明和四年（1747）経堂落成し宋版一切経を蔵す、これは延享元年より寛延二年迄目見格以上の講銀（無尽）により造営す。
一、安永元年（1772）八代高標の母鳥井氏準提観音像を寄進す。
一、天明元年（1781）金比羅廟の造営成る。
一、文政八年（1825）経堂、観音堂を残し全焼す。
一、文政十年（1827）十月本堂落成、同年十一月高翰の夫人井伊氏準提観音を安置す。
一、弘化元年（1844）十二月書院、庫裡落成す。
一、昭和二年（1927）本堂及び位牌堂を焼失し昭和四年（1929）本堂及び位牌堂の再建成る

大日寺年表

一、開山秀乗は長曾我部の一族にして讃岐の塩飽（しわく）に住み朝鮮征伐の時高政と親交あり、後出家して女島の庵に住み、偶々佐伯に任命された高政と会い、高政が帰俗すれば重用する旨を説いたが秀乗はこれを固辞し高政は慶長十三年大日寺を建立し秀乗を開山とした。
一、貞享十五年（1688）正月船頭町、内町の大火に焼失す。
一、宝永五年（1708）二月六代高慶辨財天女の廟を建つ。
一、天明八年（1788）八代高標護摩の資として米二十石を寄進す。
一、寛政十年（1798）正月城下の大火に類焼し藩は銀一貫匁を寄進す。
一、寛政十一年（1799）六、七月雨降らず藩は大日寺住持依教に命じて雨を祈らしむ。依教は簑笠を負い尺間山に登り山上の雄池と呼ぶ池に臨んで祈禱し五日にして雨大いに降り依教は簑笠を着て山を下った。
一、文政五年（1822）正月前住持依教（孤貫と号す）道徳並び高く仁和寺法親王は篤く之を信じ擢んでて京都勝功院の住持とし、次いで権僧正となり禁中に召されて御杯を賜る。佐伯藩は香華料として

年五石を贈った。

善教寺年表

一、慶長七年（1603）僧行念古市村大内に西本願寺派善教寺を建立す、高政の母妙西尼（瀬尾氏、法雲院）は三河の上宮寺の信徒であった関係から同寺に帰依す。

一、慶長十二年（1607）妙西尼の仰せで東本願寺派となる。

一、東本願寺の教如上蘆文を妙西尼に贈り、寛永四年（1627）三月妙西尼の没後善教寺に寄進す。

一、寛永十九年（1642）十二月佐伯に幽閉されていた元信州松本城主石川康長の死に当り之を後田に葬り墳墓を設けず善教寺の堂宇を古市より移して其の上に建立す。

一、天和二年三月船頭町、内町の大火に類焼し後再建す。

一、宝永二年（1682）十二月内町の火災に再び焼失し後再建す。

一、元治元年（1864）二月中村より起きた火災に又も類焼し後再建す。

久成寺年表

一、正保元年（1644）四月内町讃岐屋治右ェ門、大賀正吉等六人の日蓮宗信者、所謂久成寺六人衆により建立され碧松山久成寺と号し、僧日普を肥後の本妙寺より聘して住持とし、渡辺治右ェ門は大阪寺町久成寺の宝蔵より日蓮上人像を申し受け本尊とした。

一、宝永三年（1706）大賀清五郎鬼子神堂を建立す。

一、延宝四年桑原正長、大賀一統梵鐘を鋳造す。

一、享保二年（1717）七世日進の代現在の本堂落成す。

一、享保十四年（1729）五月六代高慶法如院の冥福の為本堂の正面に大乗妙典「毎石」字の塔を建立す。

一、享保十五年（1730）四月嗣子高能の請により六代高慶田島仁右ェ門の屋敷を崩し、池を堀り山を築き樹木を植え鬼子母神堂を建立し法如院の冥福を薦む。

一、寛宝三年（1743）九世日道の代、現在の鐘楼落成す。

一、文化九年（1812）六月十五世日秀の代、八代龍王の堂を寺中に建立し碧松善神と名付く。

一、弘化四年（1847）四月、十八世日通の代清松公像を熊本本妙寺より迎える。

一、萬延元年（1860）八月鬼子母神堂より失火し碧松明神堂を類焼す。

一、明治十四年（1881）廿世日潤碧松明神堂を再建す。
一、明治二十年（1887）廿三世日侃、清正公堂を改築す。
一、大正十一年（1922）日慧代碧松公堂を改築す。
一、昭和十七年（1942）梵鐘応召され昭和二十四年（1949）日慈代梵鐘を鋳造す。

西運寺年表

一、西運寺は苷字藤木にあり、次いで留田の寺跡に移り、慶長八年（1603）三月三重浄雲寺の光誉了意和尚現在の地に西運寺を創建す。
一、宝永三年（1706）小林九左衛門鬼ヶ瀬堰を作る。小林九左衛門の碑が西運寺の西北方「赤堂さん」の頂にあり
一、明和四年（1764）五月徴誉代梵鐘を鋳造す、梵鐘は創建の時よりあったが、百六十年を経て、音律悪しくなりたる為、新に鋳造せるものなり。
徴誉はまた寄附によらず自力にて本堂及び薬師堂を建立す
一、安永八年（1779）五月丈三尺の阿弥陀如来の立像を、知恩院末寺山城国淀の城下光明寺七世順阿和尚の安置仏で慈覚大師の作であったのを、潮谷寺真挙貰い受けて西運寺十一世宜挙に譲り西運寺の本尊とす。
一、文化元年（1804）十一月崇誉代山門落成す。山門は十一世宜誉の自力による建立で、享和二年（1802）正月より享和四年一月まで一千六十日の日時と大工二千七百人を要し、費用銀三貫匁を要した。
一、文化五年（1808）五月十二世岌誉代本尊の御宮殿落成す。
一、昭和十九年（1934）十九世縁誉代梵鐘応召される。
一、昭和三十三年（1953）庫裡の改築成る。
一、昭和三十四年（1954）五月著者増村梵鐘を寄進し、西運寺略記を記す。

家老から大庄屋へ

藩の絶対権力を有した家老から大庄屋に宛てた通知状を見ると、如何に封建的なものであったかがうかがわれて来る。以下津久見の西郷氏に伝わる文書から捨って見る。
今度殿様より御書其方共へ下しなされ候態々持遣し候間頂載いたすべく候

十二月十六日　並河李之助
磯部三左衛門

一筆申しつかわし候、御用の儀之有候間来る十日相越し申すべく候

二月六日　佐久間儀衛門
福九郎右衛門

この二つの書状では別に現在から考えても左程封建的だとは考えられないが次の雨乞いでは女子供迄総動員して彦嶽に登り袷（あわせ）を着てせい出して踊れと言い、次では御馳走が足らぬと閉門を申しつけると言い山椒の献上等随分思い切った通知状である。万一家老の意にそわないならば即座にお役御免である。これ等の書状の中に当時の文化がうかがわれて来る。

雨乞い

急度申遣候雨ごいの儀度々申融れ候へ共何といたされ候也、一せつふり申さず候間ひこだけ山の峠、床木村の内かがみのふちにて明後日十六日に雨乞いいたさるべく候。何れもせい入れられ女子供迄も出し袷物を着候て踊り仕るべく候、我等両人より奉行差遣すべく候間あざらに仕り候ては過分に申しつくべく候

三月十四日　毛利隼人人吉忠
毛利図書館　高保

長岡式部お殿様よりの御使者本嶋喜兵衛殿お帰りなされ候間津井より人足御馳走候間網代迄送り申すべく西郷六右衛門に申し候、定めて今夜は其方所にお泊りなさるべく候間、随分御馳走申すべく候。自然無馳走に仕り候はば、其方チッ息に申しつくべく候間御意を得べきものなり、

正月十六日　毛利主殿

山椒とふちの木

御意のため申つくべく候其村よりさんせう毎年いかほどづつ納め候を当年今迄にいかほど納め候也、毎年納め候定まりの高いかほど其内今年今迄に何ほど納め、誰に渡し候との儀かきつけ態々仕り我々両人迄急度相越し申すべく候、又只今よきさんせう御用に候間、五百石につきほしさんせう一俵づつあげ申すべく候、納の倉のさんせう悉済の所は、さんせう一俵につき米二俵づつ代相渡すべく候間、肝剪して急

度あげ申すべく候、油断あるべからざる御意に候

壬十月十一日　　長　左京

毛利主殿

急度申しふれ候三月六日に申しふれ候儀屋根下ふちの木長さ七尺、太さ九寸周りは太く候間六寸周りに長さ七尺にとりかえ、明日十二日に必ず塩屋へ相届け申すべく候、くれぐれ九寸周りを六寸周りの木にとりかへ急度相越し申すべく候油断あるべからず候

三月十一日　　毛利主殿

九郎衛門

旅網と賃舟

一筆して申し候然れば浦口へ旅網いわし引き候儀、先年よりお定め候間、今以て帰ふくなすべく事に候、前あじろ一番網地下の者共引き候、其次二番あみ旅人参り合ひ候はばひかせ申すべく候、端あじろの儀之もお定めの如く、旅あみも所へ参り合わせ次第一番あみにても引かせ申すべく念のために如之者也

寛永十七年十一月十四日　　磯部左衛門

益田主殿

其組の舟持中近年大阪上下に舟々御奉行仕りあげ候に就ては、御領分にて旅舟の運賃舟頭申しつけ候間、中浦より上浦つくみ迄の間相改め運賃積有之候はば、其組舟持中に積ませ申すべく、然し其組に舟之なき候時は、荷主相次第旅舟にも異議なくつませ申すべく其為かくの如くに候

子、十一月十八日　　並河李之助

豊田内蔵助

舟奉行と警備

津久見村午衛門、与左衛門、作兵衛、右三人事近年舟揃へあげられ御奉行申しつくる儀候間、唯今西年水夫役ゆるしつかわし候間、其の意を得べく候、尚々年寄は召し出し申しつくべく候

申の十二月晦日　　益田主殿

長勘解田

戸倉織部

古市の九重の搭

上岡駅の裏に古搭がある、この搭は十三重であるに拘らず九重（くじん）の搭と言う慣わしがある。搭は高さ二丈五尺余、搭の各層の四面には弥陀坐像と思われる仏體が刻まれ、最下層の高さ二尺七寸、幅二尺六寸のほぼ正方形の角石に刻まれた仏像の内、その二面は弥陀三尊であり、他の二面は弥勤三尊である事が想像出来るがこの古搭の建立の年月も建立者の名前もはっきりしない。

この古搭は佐伯栂牟礼城主佐伯雄治が御萱子千代鶴の病弱を憂い全快を祈願して金弊を埋めてその上に搭を建てたと言ふ口碑がある。別に栂牟礼軍記の記事によると「大永五年四月十代城主雄治は御萱子千代鶴の病弱なりしを憂い山上寺の僧春好と謀り、現在の所在地を祈禱の場所にして祭壇を設け金銀の弊を立て数十日間斉戒沐浴して祈禱し、祈禱に用いし一切の物品を埋め搭を建つ」と記している。

これに対し大正六年十二月喜田博士は鎌倉時代末期のものと推定されている大和般若寺の十三重の搭と酷似している点から推定して鎌倉時代の作と見られる多数の古銭を発掘し鎌倉説が有力となった。

白潟貝塚の発見

白潟貝塚は若宮八幡宮の境内林が改植される事になり八幡宮の責任役員であった佐伯市龍護寺の米沢物吉氏が数百年後に伐採される杉を是非植えて見たいと志願して植林に当たることになった。昭和三十三年二月二日朝早くから唯一人で御旅所側から植え進め、仲々手間取ってその日は全面積の半分位しか植えなかった。その後十数日たった二月十七日第二回の植林に従事したが、米沢氏一人で本殿側から植林し午后四時頃もうやがて終ろうとする頃大木の根株の所からカキ殻を堀り起した。これはと思って次々に杉苗を植えようと堀り起すと、このあたりは土が少なく一面貝がらばかりで、客土を持って来ねば植えられない状態で、仲々手間取り日暮れにやうやく植林を終った。

その晩今日出た貝殻の事を思ひ合せ、あれは貝塚ではなかろうかと考え翌十八日市役所を訪れ教育委員会と長良貝塚の発見者疋田泉氏と八幡宮宮司とで調査にかかった。現在の貝塚のある所の西北端に当る土を堀り取った跡から弥生式下城土器の破片が点在しているのを発見し、かなり広い面積を占めている貝塚である事を認め、別府大学の賀川光夫氏に報告し同年六月十三日本格的の調査を行ひ、土師器と祝部土器を使った平安朝時代のものと認められる火葬の骨つぼ二個と、大型蛤刃石包丁を発掘した。この調査の結果を総合すると白潟遺跡は弥

生式前期、中期の貝塚で、土器、住居跡があった事が判った。

明治、大正時代の文化

明治維新後欧米の文化は急速に佐伯にも輸入され幾多の文化施設が出来た。明治五年（1872）五月四教堂は廃止され佐伯学校が置かれたのを初めとして同六年（1873）佐伯用務所、同七年（1874）鶴谷女学校の開設、同八年（1875）畑の浦港の開築があり、同年船頭町田島善助は郵便事務取扱を初め、自宅の店頭の傍で事務をとり、配達夫は雨天には高足駄、雨傘で配達していたと言う。同十一年（1878）南海部郡役所の開設があり、鶴谷女学校を廃して佐伯学校に合併し、同十三年（1880）汽船佐伯丸の進水があり、同十四年（1881）佐伯港、地松浦港の開築があった。又同廿三年（1890）鶴谷学館を設けて中等教育を授ける事となった。国木田独歩が佐伯に来て教師をしていたのは其の当時である。同廿五年（1892）電信線が開設され電報が打たれる事になった。同卅一年（1898）中野村小半に釣橋が架設され、同三十七年（1904）水ノ子燈台が落成し陸海の交通に嘗益する所が多かった。電話が旧佐伯町に開設されたのは明治四十五年（1912）で、本町に火力発電所が出来て佐伯町内に電燈がつく事になったのは大正の初期であった。明治四十四年（1911）四月郡立佐伯中学の開設があり、大正元年佐伯図書館が大手前に落成し、大正七年（1917）郡立佐伯高等女学校が出来た。この郡立佐伯中学は大正七年県立となり、郡立佐伯女学校も同九年には県立となった。漸くして佐伯の文化施設は漸次其の歩を進めて行ったとは言え中央の文化施設に比べれば真に遅々たるものであった。

番匠川の孤火

一つ、二つ、三つと現われた親火から瞬く間に数百の火に分れパッと消え、又右に左にアカネ色の飛び火となって無数に分れ二、三キロの長さに渡って光が明滅する。

これは井崎川の栃原（とちわら）附近から小又橋の下、更に上小倉山王部落の竹藪にかけて、更に遠くは門田、細田部落に渡って夏から秋にかけて水平線上を神秘な光で彩る夜の異観である。

部落の者はこれを孤火といい「千どろ万どう」（どろは燈の異か）とも呼び、洪水に溺死した亡者のともす火だとも言っている。

熊本県宇土郡松合沖の不知火は各種の陽炎を呈する空気層を漁火の光が通過する時に現れるのだと言われているが、小又橋附近の孤火は

沖の漁火もなし川原と竹藪である点からこれを松合沖の不知火と同様に説明する訳にはいかない。

夏の夜、涼を求めて、小又橋の本に目を点ずる孤火の千変万化、点々と光がつくとそれを中心に左右にパッと拡がり瞬間に明滅するのを見るのは夏の夜の神秘である。これは果して亡者の点す火であろうか。この孤火は西運寺の境内からよく眺める事が出来る。

毛利高棟氏の手紙

拝啓向暑の候益々御清営郷土の為大慶に存じ候。陳者御書状並に鶴藩略史御寄贈下され御芳状添けなく存じ候。　災の為書籍は悉皆灰燼に帰し郷土史は勿の入手にて、黙も珍本記事勧気に致し候。嘗て郷土史に就いては両親よりは勿論なれども佐藤倉太郎氏に師事し同氏の案内にて方々に参り候。藩祖が眼病の為（是は表向の話）滞在されし松浦にも行き親しく大谷の水を掬びその美味なるを賞し、又此の地より密に参詣されしと言ふ広浦の山上のキリシタン寺の跡にも登り候。此の日大笑ひの事あり小生は師の案内にいささかの疑念も無く小舟に揺られつつ史談大いにはづみ居りしに、松浦の沖にさしかかりし際師が「此の舟はどこに行くのか広浦と言ふのはどこか」と船頭に尋ね候に船頭も知らずと言ふに、皆抱腹絶倒し候（一先づ松浦に着け目的地をよく質ね再び舟舷致し候ひき）師後々迄この事を興がり申し候。両親も鶴谷先生も已に亡き今日貴下を郷土と得、貴著を掌上に受け有り難き極みと候。益々御自愛の程祈り候。延引乍ら御礼迄　斯の如くに御座候